

〈ケア〉を考える会 (第103回)

■日時：2015年 **8月2日** 13:30~17:30

■会場：京都市山科区安朱中溝町3-2
山科駅より東 徒歩3~4分の民家 (山添)
(安朱保育園 東隣)

■当日の大まかな予定
13:00 ⇒ 有志集合…会場準備等
13:30~ ⇒ 学習会(読書会)
15:30頃~ ⇒ 懇親会(笑いヨガなども)
17:00~17:30 ⇒ 片付け、終了
(その後で、名残惜しコーヒータイム?)

■内容

(1) 学びの会 (読書会)

鷲田清一『**老いの空白**』(岩波現代文庫、2015年刊)

「2 できなくなるということ」

「3 〈老い〉の時間—見えない〈成熟〉のかたち」

(2) 懇親会…食べながら飲みながら語り合います(持ち込み歓迎)

※山添さんご夫妻の手料理は絶品です。美味しいこと請け合い
※懇親会参加者で実費(1000円程度)ご負担願います

■参加申し込み、問い合わせ、メーリングリスト登録希望
⇒ 林まで：884michiya@gmail.com



▼おたがいの言葉を手がかりに考える時間をもつこと、確かめながらゆっくりと考える時間を共にし、分け合う
「考え」でなく、「考え方」をお互い共有してゆく
結論はありません
プロセスをゆたかに

(長田弘『なつかしい時間』P.191)

「老いの空白」ノート

▼〈老い〉のかたち、〈老い〉の文化が、〈老い〉そのものの内にも外にも見えない…。〈老い〉は空白のままである。▼〈老い〉のかたちはこれから長い時間をかけて作ってゆかなければならないだろう。(…)〈老い〉は(…)社会にとって根底的な問いとして、いま立ち現われている。(はじめに)

▼〈老い〉は、ふつうのひとつもしくはふつうの家族にふつうに訪れる。▼人間は介護されつつ誕生し、生育し、しばらくのあいだ自立して—これもほんとうは分業というかたちで支えあいのなかにある—、そしてふたたび介護されつつ死にゆく。(5頁)▼〈幼〉と〈老〉に共通するのは、いずれも単独で生きることができないということである。いいかえると、他のひとの世話を受けるというかたちでしか生存を維持できないということである。(11頁)▼支えあいというのはけっして理想なのではなく、ひとであるかぎり必然の事実なのである。(12頁)▼《〈生産力主義〉のなかで》〈老い〉は、保護や介護、ときには収容や管理の対象とみなされてゆく。年若い、じぶんはもう消えたほうがいいのではないかと、じぶんはお荷物、厄介者でしかないのではないかと問わないで生きえているひとは(…)たぶん少なくない。無力、依存、あるいは衰え、そういうセルフ・イメージのなかでしか〈老い〉という時間を迎えられるていないということが(…)〈老い〉の空白でなくていったい何だろうか。(15頁)▼ひとはただ生きているだけではなく、生きるということ、じぶんがここにあるということ、そのことの意味をも確認しながらしか生きられないものであるのに(11頁)

▼《〈ケア〉についての》語りが介護する側からばかりなされてきた(…)。介護される側から発せられる言葉は乏しかった。(19頁)

ひととひととの関係において重要なのは、各人が主体的にどのようにしようとしているかではなくて、いつとはなしにお互いが心を開いてしまっているという事態である。

(池上哲司『傍らにあること』P.169)



「〈ケア〉を考える会」ホームページ
<http://care-kyoto.jimdo.com/>

岡山でも：「〈ケア〉を考える会-岡山」
<http://okayama-care.jimdo.com/>

文字が
大きく
読みやす
くなりました!
岩波
現代文庫
創刊15年

〈老い〉は、
ほんとうに
「問題」なのか?